

Title	セイロンにおけるコーヒー・プランテーション労働力の調達をめぐる諸問題
Sub Title	Estate laborers of coffee industries in Ceylon
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.3 (1981. 12) ,p.95- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0095">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0095</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# セイロンにおけるコーヒー・プランテーション労働力の調達をめぐる諸問題

池田年穂

セイロンのコーヒー・プランテーション（一八二〇年代～一八八〇年代）、マラヤのコーヒー・プランテーション（一八七〇年代～一九〇〇年代）は、共に比較的短命に終っているが、イギリス植民地による内陸開発の胎動とほぼ時を同じくして始まり、現在の両地域の主要プランテーションである茶およびゴムのプランテーションの先駆的存在となつた点で重要である。プランテーションは、ヒューリル＝グルーの言葉を藉りるまでもなく、外来性（étrangéité）により特徴づけられるが、経営能力、資本、内陸と港市ひをつなぐ輸送網などは、このコーヒー・プランテーションの時代に両地域にその原型がもたらされたと言つてよい。とりわけ、外来アジア人導入による労働力調達の習慣であるカンガニーモードは、この時期に成立した。

本稿では、セイロンに於けるコーヒー・プランテーション成立の条件の一つとして、労働力調達の問題をとり上げる。セイロンのコーヒー・プランテーションとマラヤのコーヒー・プランテーションにおける労働力の調達をめぐる諸問題

セイロンは一五〇五年、ポルトガルにより海岸低地の一部が拠点植民地化された。一六五六年にはオランダがポルトガル勢力を駆逐し領土支配を拡大するが、内陸支配にまでは至らなかつた。コーヒーは、セイロンに於いては外来種（exotic）であるが、この時代までには導入されていた。<sup>(1)</sup> 但し、重商主義国家オランダ

は、ジャワでのコーヒー栽培を奨励しました強制するが、セイロンではシナモンのモノポリーに力を注いだ。シナモンはサラーガマ<sup>(2)</sup>というシンハラ人の特権的カーストにより収穫され、オランダ人の手により毎年一定量が輸出された。コーヒーは、シンハラ人の小農により少量栽培され、その一部はムスリム商人などに集荷され、細々と輸出されていた。シンハラ人自身はコーヒーの花を祭式に用いたり、葉をカレーの原料にする程度で飲料としては用いなかつた。<sup>(3)</sup>

一七九六年にイギリスがオランダ勢力を駆逐したが、その支配地域は当初は海岸低地にとどまり、中央部のキャンディー地方を征服し全島支配を始めるのはようやく一八一五年になつてからである。容易に想像される通り、長い間のヨーロッパ人支配により、海岸低地のシンハラ人とキャンディー地方のシンハラ人という分離した集団ができ上つていた。その上に、セイロン島は普通年降水量七五インチの線でドライ・ゾーンとウェット・ゾーンに分けられるが、主としてドライ・ゾーンに、セイロン・タミルという民族集団が居住していた。

イギリスは一八一五年以降、徐々に道路網を整備しながら内陸開発に入る。<sup>(4)</sup>イギリス東インド会社がオランダ統治からうけついでいたシナモン・モノポリーを一八二二年政府の手に移し、傍ら自由主義貿易商品としての農産物育成を図り、インディゴ、サトウキビ、棉花、タバコなどを次々と導入した。<sup>(5)</sup>その中でもサトウキビが最も期待されたが、どれも華々しい成果をあげえなかつた。

コーヒーのプランテーションは、一八二三年から翌年にかけてバード中佐がガンボラに、総督バーンズがキャンディーに開設し<sup>(6)</sup>だプランテーションが最初のものであるとされる。植民地における官吏・軍人による先行的経済開発というパターンがここでも見受けられる。当時アジアでは唯一アラビア・コーヒー(*coffee arabica*)が栽培されていたが、これはセイロン島では海拔<sup>(7)</sup>二、五〇〇フィート以上の丘陵地の日陰が適地であったため、キャンディー地方を得てようやく大規模生産が可能となつたのである。但し、コーヒー・プランテーションの開設に拍車がかかりられるのは一八三三年から暫くたつてである。この年に、グローバルな規模に於ける重要な事件と、セイロンに於ける重要な事件とが重つて起きている。

セイロンのコーヒー・プランテーションの労働力は、インドから移つたタミル人がその殆んどを担つた事は既に述べた通りであるが、何故セイロンにインド・タミル労働力を吸収せざるを得なかつたのかという問題は、二つの側面から考える必要がある。

第一は労働力需要の増大である。これについては、一八三三年の世界的に重要な事件、つまりイギリス領全域に於て、奴隸の解放が宣言された事を重視しなければならない。その結果、黒人奴隸を使用していた西インド諸島でのコーヒー生産量が激減した。<sup>(8)</sup>それに対しヨーロッパでのコーヒー需要は、フランス、ベルギーをはじめとして増大していった。<sup>(9)</sup>イギリスとしては、その差をセイロンでのコーヒー生産が埋めることを期待せざるを得なくなり、

表1. セイロンのコーヒー産業の発展 (1834~1842)

	コーヒー価格 (ブツシエル当りリシリング)	生産量 (ブッシュル)	払い下げ地面積 (エーカー)
1834	15 s 3 d	138,800 <sup>1/2</sup>	337
35	15 s 3 d	161,975 <sup>11/28</sup>	434
36	22 s 6 d	190,161 <sup>1/2</sup>	3920
37	22 s 3 d	223,697 <sup>1/2</sup>	3662
38	30 s	220,735 <sup>1/2</sup>	10401
39	25 s	365,062 <sup>1/2</sup>	9570
40	32 s 2 d	858,000	42582
41	36 s	956,850	78686
42	45 s	1,254,263	48534

Van Den Driesen, "Coffee Cultivation in Ceylon",  
*Ceylon Historical Journal*, vol. III, part 1, 1953, p. 42

の表と p. 43 の表より合成

ランテーションの拡大の模様は表1に明らかである。  
第二は労働力の現地調達の可否である。現地調達が仮に可能ならば、わざわざ労働力を移動させる必要はなくなる。

ここでコーヒー・プランテーションでの労働内容について触れておく。一般に熱帯プランテーションが温帯農園に比べ労働集約的であるのは言うまでもない。同じ熱帯プランテーションの中では、コーヒーの場合は茶に比べ単位面積当たり労働力がかなり少なくて済む。<sup>11)</sup>またコーヒーの場合には、小農生産が比較的容易であり、現在に至るもそのパーセンテージが高い事からも分るよう<sup>12)</sup>て、或る程度粗放な経営管理によつても成り立つ。シャンドの著作その他から判断して、<sup>13)</sup>コーヒー・プランテーションでの実際の労働内容の特徴は二つある。一つはその単純性である。苗床つくり、剪定などに手間を要しはするが、除草、日覆い、収穫、乾燥場への運搬といった大部分の作業は決して複雑なものではない。また果実を莢から摘出し殻を除く処理機械も精密なものではなかつた。今一つの特徴はその季節性である。セイロンでは八月から一二月にかけての収穫期以外の時期には、労働力が二分の一から三分の一ですんだ。

シナモンの収穫はシンハラ人社会のサラーガマという特権的カラーストが行つていた事は既に述べた。新興のコーヒー・プランテーションでの労働を独占するカラーストはもとより存在しなかつたが、一八三〇年代まではコーヒー・プランテーションは土着のシンハラ人社会から労働力を吸収していた。一八三三年にセイロンではコールブルック改革という極めて重要な改革がなされるが、

それ以前はラージャ・カーリヤという賦役制度が利用された。<sup>(14)</sup> ラージャ・カーリヤは本来カースト規制に則った賦役制度であるので、一時期にせよラージャ・カーリヤが労働力を提供していた事から、プランテーション内労働が、特權的なものであれ逆に賤業的なものであれ、カースト規制にふれぬ事が理解できる。また土着の稻作農耕と併存し得た事も推察できる。ところが、コールブルック改革以後は、土着のシンハラ人社会からは労働力を吸収できず、海岸低地から移住したシンハラ人、次いで大量のインド・タミルを労働力として使用した。普通これは土着シンハラ人の「自給自足的農村の解体」が進んでいたためと説明されるが、それだけでは説明が不十分であると思われる。その根拠として、プランテーション以外のコーヒー生産、つまり土着のシンハラ人による小農生産についてふれておきたい。キャンディー地方が英領となる以前、例えば一八〇六年一三年の間の年平均輸出量は二六一、五〇〇ポンドであったのに對し、一八一六年一二〇年では四三四、八〇〇ポンド、一八二一年二五年では一、一〇〇、〇〇〇ポンドと上昇している。<sup>(15)</sup> 小農生産は、例えば一八五〇年代に小農生産のコーヒーは輸出量の一五ペーセント前後を占めながら、輸出額では全体の一〇ペーセント強といつたように、決して良質のものではなかつたが、プランテーションの時代に入つても増加する。<sup>(16)</sup> この事実から知り得る事は二つある。一つは、シンハラ人小農がコーヒー生産にふりむけるべき余分の土地と余分の労働力を持つていた事である。自給自足経済の中の家族制度は多くの場合、かなりの余剰労働力を包含し得るものである。今一つ

は、自給自足的、つまりは非貨幣的経済の中では小農は限定された欲求しか持たず、貨幣的インセンティヴに中々反応しないといふ通説に対する一種の反証を見出せる事である。植民地に於いて、また現在でも一部のアフリカ諸国などに屢々みられる政策であるが、人頭税や家屋税などの各種の課税により土着社会を強制的に貨幣経済の中におしこむといった政策はこの時期のセイロンでは採用されていない。それにもかかわらず、シンハラ人の小農は必要として以上に欲求として貨幣を求めコーヒーを栽培しているのである。

「自給自足的農村の解体」の遅れと並んで土着のシンハラ人が労働力として吸收されなかつた理由として屢々あげられたものに、シンハラ人がタミル人より怠惰であり、「人種」的に劣等であるという説がある。これは現在では容易に反論しうる説であるが、嘗ては「人種」という概念に、現在の民族という概念の属性であるものが多分に含まれていた事には注意する必要がある。何にせよ、この説に対する最も分りやすい反証として、セイロン島にはセイロン・タミルというインド・タミルと同根の集団が存在するが、彼らもプランテーション労働力としては殆んど使用されていないという事実が中村によりあげられている。<sup>(17)</sup>

一八五七年にウォードは以下のように述べているが、極めて公平な観察であるように思われる。

「シンハラ人がコーヒー・プランテーションでの労働に反感を抱くのは、規則的な時間、規律、監督による管理といったもののためで仕事の量によるものではない。（中略）のみならず、

プランテーション内労働の拘束がいかにシンハラ人には気に入らぬものといえ、彼らが人種として努力を厭うとか報酬に鈍感だと考えることはできまい。逆にプランテーションにつきもののかつい仕事（すなわち、開墾や牛車輸送など）は皆彼らによつてなされているのだ。しかしそれらの仕事では、彼らは或る程度自分自身が主人でいられる。彼らは請負いなどで働くのであって、カンガニーの命令にはなじまないのだ。」

つまり彼らはプランテーションでの労働を、カースト規制における賤業とは全く概念が異なるが、自分達にふさわしくない（degrading）ものと感じていた。またプランテーション内労働のもつ管理的側面、とりわけ「時計的時間」といったものに嫌悪を感じていた。また中村は、シンハラ人が地元の社会の絆から切り離されていないので、冠婚葬祭、水利設備や共有地の管理など様々の村落共同体生活に参加する必要のある事を、茶やゴムのプランテーション經營者がシンハラ人労働力の難点としてあげていると記しているが、その事情は時代を遡ってコーヒー・プランテーションの時代には一層顕著であつた筈である。

キャンディー地方の人口は、英領化されて六年後の一八二一年に、二五七、〇〇〇人程度であったとされる。小規模なこの人口から拡大していくプランテーションに労働力を吸収するために、論理的に言えば、自給自足経済の中の労働生産性と同じかあるいは慣れぬプランテーション労働という点で当初はより低い生産性に対し、自給自足経済における労働報酬より高い報酬をプラン

ター側が提供する必要がある。現実にはプランター側が提供した報酬は土着のシンハラ人には十分な魅力をもたなかつたが、その同じ報酬がインド南部の労働者にとっては十分な吸引力をもつた訳である。ロバーツによれば、プランテーション初期にはタミル労働者は一日四ペニス、一八四〇年代半ばには六ヶ九ペニスの報酬をプランテーション内労働から得ていたのに対し、マドラスでは一八五八年になつても三ペニスで働いていたという。<sup>(20)</sup>

ジャヤラマンはインドからセイロンへの移民を、一八三九～一九〇〇年、一九〇〇～一九三〇年、一九三〇～一九五〇年の三期に分けている。<sup>(21)</sup>第一期は一八三九年からとしているが、インド移民が大挙して渡るのはこの頃からである。またロバーツはセイロンのコーヒー・プランテーションを以下の五期に分けているが、一八三九年はその第二期、拡大期の始まった年である。

- 1) 実験期 一八二三～三九年
- 2) 拡大期 一八三九～四六年
- 3) 沈滞期 一八四六～五〇年  
(恐慌 一八四七～四八年)
- 4) 安定成長期 一八五〇～八〇年
- 5) 崩壊期 一八八〇～九〇年

一八三九年から一八七〇年までの三二年間のインド移民のセイロンでの出入国者数は表2の通りである。入国者数は一八四三年以降急速に伸びる。また一八四七～四八年恐慌の影響をうけ、一八四八年から五～六年間は入国者数が減っている。ジャヤラマンは第二期（一九〇〇～三〇年）の移民と異なり、第一期（一八三九

表2: セイロンにおけるタミル労働者の出入国数(1839~1870)

年 次	到 着		出 国		到着 一出国	出国 / 到着	史 学 五 十 一 卷 三 号
	男子	婦女子	男子	婦女子			
1839	2432	287	1956	246	517	0.81	
40	3326	488	3464	259	91	0.98	
41	4523	527	4243	399	408	0.92	
42	9025	445	10691	573	-1794	1.19	
43	35195	1405	18977	1176	16447	0.55	
44	74840	1681	38337	1360	36824	0.52	
45	72526	875	24623	181	48597	0.34	
46	41862	455	13833	73	28411	0.33	
47	44085	2055	5897	107	40136	0.13	
48	29936	2236	22680	709	8783	0.73	
49	22171	1698	10397	418	13054	0.45	
50	37155	2267	20758	851	18813	0.55	
51	28224	1256	16775	610	12115	0.59	
52	50843	2996	22664	1064	30111	0.44	
53	36583	2695	27129	1359	10790	0.73	
54	54014	13307	21640	1901	43780	0.35	
55	55979	6288	23130	886	38251	0.39	
56	59263	8741	32148	2161	33695	0.5	
57	60048	9272	36887	3050	29383	0.58	
58	75172	20890	45747	4693	45622	0.53	
59	32377	7708	43900	4918	-8733	1.22	
60	41906	11039	21279	2145	29071	0.45	
61	43147	10285	32636	4566	16230	0.7	
62	51859	17037	35577	6332	26987	0.61	
63	53828	16895	50334	11431	8953	0.87	
64	63087	18713	54724	12555	14521	0.82	
65	66007	23590	51504	13033	25060	0.72	
66	58488	29840	38997	10232	39099	0.56	
67	31688	11091	35507	10491	-3219	1.08	
68	41499	14222	44820	9706	1195	0.98	
69	43998	13673	43820	10505	3346	0.94	
70	51644	13570	44797	10295	10122	0.84	一〇〇

R. Jayaraman, "Indian Emigration to Ceylon", *The Indian Economic and Social History Review*, vol. IV no. 4, 1967, p.322 の表と p.324 の表より合成  
 項目には変更を加えてある

(一九〇〇年)の移民はファミリアルでないとしているが、一八三九(23)七年までの婦女子入国者数を総入国者数で割ったものが一六、三パーセントに過ぎぬ事から分るように、実際に男子移民が婦女子の移民より圧倒的に多く、従つて単身の移民である。そして単身である以上永続的でないと考えられるが、実際に表2の三年間に、入国者数延べ一、六四四、二七二人に対し、実に六三、九パーセントに当る一、〇五〇、一一五人が出国している。この数字は、セイロンにおけるインド移民の自然増加率が極めて低かったであろう事、それに比べ初期移民の死亡率が往復の行程の困難や劣悪な労働環境のためにかなり高かつたであろう事を考慮に入れれば、インド南部→セイロン→インド南部という「還流」現象をより如実に物語ることになる。言つてみれば、彼らはイミグラント(移民)労働者という以上にミグラント(渡り鳥)労働者であつたのである。(24)ジャヤラマンによれば、「還流」の期間は一年以内としているが、コーヒー・プランテーション内労働の季節性にあわせたこのインド移民の季節性という特徴は、基本的にはコーヒー・プランテーションの時代を通して続いた。

フォレストは、最初のカンガニーは、一八四四年バード中佐により派遣され一四人のタミル人労働者を伴つてセイロンに戻ったとしている。これ以前にも同様の例は存在したろうと思えるが、いずれにせよカンガニー制度はセイロンのコーヒー・プランテーションへの労働力供給のために開発された。一八四七年には印度政府により、「他国への移民の中継地として用いない」という条件で、セイロンへの移民が合法化されている。(26)

セイロンにおけるコーヒーブランチーション労働力の調達をめぐる諸問題

一八八〇年代のマラヤに於いては、既存のシュガーブランチーションの契約移民使用に対し、コーヒーブランチーションのカンガニー移民使用という、労働力調達に際立つた差異が見受けられた。(27)マラヤにおけるカンガニー制度は、セイロンで一八六九年から蔓延し始めた病害(Hemileia Vastatrix)のために、セイロンでのコーヒーブランチーション經營に見切りをつけマラヤに渡つたプランターが持ちこんだものである。セイロンのコーヒーブランチーションの時代にも、グローバルな観点からは、この契約移民制度とカンガニー制度との対比が見受けられた。契約移民制度は、モーリシャス、英領ギアナ、トリニダード・トバゴ、フィージーなど遠隔のいわゆるシュガーブロニーにインド移民を供給するものであった。通常の契約期間は五年であるが多くの場合に旅費や仕度金といった前借金を期間中に皆済できず、更に四年から五年の契約更新をしなければならなかつた。汽船輸送が一般化する前には遠隔地との往来は難しかつた。「還流」現象の少なかつた事とファミリアルな要素の強かつた事がこの制度の特徴である。それに対し、カンガニー制度は、近隣諸国に通常二年以内という短期的な労働力を供給するものであつた。その特徴を簡単に記せば、

- 1) カンガニーがプランターの委嘱をうけ自分の郷里に帰り、親類縁者など自分の属するカーストの人間を短期の約束で連れて帰る。同じ村であれば、ジャジマーニー制を利用して低いカーストの人間を連れ帰る事も多い。実際にプランターに好まれたのは、下層カーストの労働者であった。契約は多くの

場合口約で行われる。同一村落の者が一団となつて移住するので、プランターの側で定着傾向を高めようとする事は可能である。

2) 時には親族への前渡し金、借金の返済金なども含め、往復の旅費はすべてカンガニーが配慮する。従つてカンガニーは、プランターとタミル人労働者の間にあつて一種の金融的職能をも営む事になる。同時にカンガニーは、連れ帰つた労働者(29)に対し親権者的態度で接しあらゆる面倒を見る。

3) カンガニーはプランターから一定の俸給を得るほかに、誘致の手数料、労働者の監督費を受け取る。カンガニーの掌握する労働者の数は二〇~三〇人程度であるが、それに数倍する労働者を配下におく場合にはカンガニーの下にサブ・カンガニーがおかれることもある。

4) タミル人労働者は通常二年以内に渡航費などを返却するものとされるが、これは強制しえないことになっている。また、プランターの側も労働者の側も一ヶ月前の通告で契約を解除できる。但し、労働者の側でその権利行使する例はまれである。

次にトランスポーテーションについて簡単にふれておく。地理的な近さからくる印象に反して大変に困難な往復だった。インド側でパウンベンやチュチコリンを船出した移民はすしづめにされたまま、マンナールかコロンボに到着する。コロンボ＝キャンディー間の道路の方が安全な行程であったが、多くは手近なマンナ

ールに上陸する。一八三九~四三年という早い時期ではあるが、全到着者数の中でコロンボに到着した者の比率は二八パーセントにすぎない。<sup>(31)</sup> マンナールからキャンディーまでのノース・ロードを一五〇マイル以上も徒歩で進むのだが、治安も悪くコレラや天然痘に罹ることも多かつた。<sup>(32)</sup> プランターズ・アソシエーション(栽植者協会)によつて道筋に「休息所」が建てられ、死者の数が減少するのはようやく一八五四年になつてからである。<sup>(33)</sup> いざプランテーションに着いても、労働条件・生活条件共劣悪なものであった。コーヒー・プランテーションはかなり海拔の高い地域に設けられたため気候が寒冷であることがまず労働者を苦しめた。セイロンのプランテーション産業がイギリス領における奴隸の解放と関連して盛んになつた事は既に述べた。契約移民に特にその性格が強いとされるが、タミル人労働力はいわば黒人奴隸の代替労働力であった。実際プランターは屢々「奴隸を扱うよりもひどく」タミル人労働者をとり扱つた。長屋(lines)は粗末なものであり、医療は劣悪であり、恐慌時には満足に賃金が支払われぬ事もあつた。病人をプランテーションから追い出す例も多かつた。<sup>(34)</sup> そういうつた状態にプランター側が眼を向けるのは、初期のスペキュラティヴなプランターが姿を消し、またプランターズ・アソシエーションなどもできる一八五〇年代に入つてからである。<sup>(35)</sup> その後に入つてもプランターはタミル人労働者にさしたる同情を持たなかつた。自身プランターであつたサボナディエールが一八六年に、「新たにプランターとなる若者のためのマニュアル」として著した『セイロンのコーヒー・プランター』の中に、プランタ

ーの本音がうかがえる。<sup>(36)</sup> プランターはプランテーションで決して「王侯貴族」のように生活していたわけではなく、彼らの眼からみると労働意欲に乏しく、食言を旨としておよそ信頼のおけぬタミル人労働者を如何に使用するかに腐心していた。新たにプランターになる者は、俗な言葉を使えば労働者に「なめられ」てはいけないとまで言っているし、労働者の言葉を修得して家父長的に振舞うべきだともしている。労働力不足から前借金が段々高くなり、しかもカンガニーがその前借金を道具に詭計をめぐらす事も多かつた。サボナディエールの見解では、タミル人労働者は、衣服・住居・寝具・衣料全ての点でインド本土におけるよりコーヒープランテーションの方が恵まれている。また、プランテーションと本土との往復において病人を置き去りにし、また病人ができると自分達の間で長屋から追い出したりするのは彼らの利己心と残酷さを示すものであるとしていて、そういう状況に自分達が関わっているという自覚は薄い。

既に述べたが、プランテーションにおける労働報酬はプランター側の労働力不足を反映して上昇していった。それはより短い期間を例にとっても言える。ドリーセンによれば、まだ恐慌の影響の出ていない一八四六年にインド移民の入国者数が著しく減少するが、その結果一八四六年以前に月一八シリングだった賃金が二〇シリング以上にはね上った。<sup>(37)</sup> カンガニー制度というワン・クッシュョンをおいてではあるが、需給のバランスにより賃金水準は運動した。ただここで注意すべきは、労働力の量的側面にのみ注意

がはらわれ、質的側面、特にその向上については注意が大してはらわれなかつたことである。

旧イギリス領において、労働人口の少ない白人の入植植民地、いわゆるホワイト・ヨロニーでは、奴隸解放後は機械を導入することで省力化を図るか、または賃金を高くして生産性を上昇させるかの二つの方法が、移民導入による労働予備軍の創出と並んで実行された。多年生作物を栽培する熱帯プランテーションでの労働の機械化は大変難しく、コーヒー・プランテーションでの労働は現在でも概ね人手に頼っている。それ故、可能性としては第二の方法、つまり労働者の生産性を上昇させることができなかつたのかという事になる。

労働力の「熟練化」という概念には二つの方向性がある。一つは新しい労働技術の導入であり、これがいわゆる熟練労働力を生み出す。今一つは分類上は未熟練労働力であるが、訓練により習熟する事である。茶のプランテーションに於いては習熟は大きな要素であり、労働力の等級付けとそれに対応した賃金体系とが一般化している。コーヒー・プランテーションでの労働はより単純なものであつたため習熟の重要性は茶のプランテーションの場合より小さいが、単身移住の弊を避けるためにも「定着化」は大きな意味を持つた筈である。ハビランドは、移民が単身であるために起る弊害を具体的に述べている。<sup>(38)</sup> 身の回りや食事の世話をしてくれる者がいなければ、不潔で栄養面で問題がでてき、ひいては病気にも罹りやすくなり、またインド本土では見受けられぬほどに自尊心を失ない飲酒にふけるようになるというのである。

セイロンにおけるインド移民の一八三九～七〇年の間の出国者数を入国者数で割ったもの、婦女子入国者数を総入国者数で割つたものが各々六三、九パーセント、一六、三パーセントであつた事は既に述べた。次に、これをコーヒー・プランテーション拡大期（一八三九～四六年）、沈滯期（一八四七～五〇年）、安定成長期の中の一八五一～七〇年までの三期に分け各々の婦女子入国者の比率をおつてみると、拡大期、沈滯期は各々二、四パーセント、五、八パーセントにすぎないが、一八五一～七〇年の期間には二〇、二パーセントと上昇している。一般的には婦女子移民の比率は定着化が高い相関があるとされているが、出国者数を入国者数で割つたものを見ると、拡大期、沈滯期の各々四八、一パーセント、四三、七パーセントに比べ、一八五一～七〇年のものが六九パーセントとむしろ上昇している。因みにこの一八五一～七〇年の間の婦女子の出国者数を入国者数で割つたものは四八パーセントになる。つまりセイロンのこの時期においては、或る程度婦女子をも含んで「還流」現象が成立していたわけである。コーヒー・プランテーション内労働の単純性と季節性とが彼女らにもそのような季節労働を許容したと言えよう。

労働力が定着化しない事にはハビランドが述べたようなデメリットだけでなくメリットもあつたわけであり、第一には労働力が必要になつた場合にはカンガニーに募集をさせねばそれだけでレイ・オフと同じ効果をもつ。またプランテーション労働の季節性に労働力供給をあわせる事ができる。その上、住宅その他の厚生施設に力を注ぐ必要も少なかつた。

プランター側がほぼ慢性的に労働力不足に悩まされながら、タミル労働力の定着化を歓迎しなかつた事情をあげれば、第一にはプランター側の資金不足である。例えばスノードグラスによれば一八四四年にコーヒー・プランテーションを開設するのに要した費用は最低三、〇〇〇ポンドであったが、殆んどのプランターがロンドンやコロンボの代理商社（Agency House）やセイロン銀行などから土地や将来の収穫物を抵当に開設資金を借り、少なくとも三年以上、実際は六～七年以上の間、労働者に賃金を支払いながら収穫を待たねばならなかつた状態では、差当り必要な投資以外に資金をつぎこむ事はできなかつた。

第二には、コーヒーもその例外ではなかつたが、輸出商品作物というものの国際市場における投機性があげられる。また植え付けてから収穫まで数年を要する間に、需要が冷えこむ可能性も高く、プランターは長期的なペースペクティヴをもつことが難しかつた。<sup>(41)</sup>

第三には、プランターが眼のあたりに見たタミル人労働者の低い民度・生産性から帰納した、彼らをそれ以上訓練によって生産性を向上させる事はできないという一種の確信である。

そして最後に、何より大きな与件として、常に人口過剰であつたため、労働力供給の後背地として機能したインド南部の存在があげられる。

(1) 導入時期については諸説がある。M. L. C. Ilangakoon,

## 注

'Coffee-Its Cultivation and Curing', Tropical Agriculturist, vol III part 2, 1955, p. 102. D.M. Forrest, 'A Hundred Years of Ceylon Tea, 1867-1967', London, 1967, p. 29. ベトガクーハ・ヘボンベヌ共に、モルムガル、熱力制運の前とトドシト煙人のモラサウ込もれたヒトヒコ。⑩°Van Den Driesen, 'Coffee Cultivation in Ceylon', Ceylon Historical Journal, vol III part 1, 1953, p. 31. ムニーヤハは導入時期を一六九〇年ヒコ、オランダの植民地主義の中に位置す。

(8) H.C. Ray ed., 'History of Ceylon', Colombo, 1958, p. 41, p. 48. キラー・ガマの特權ヒツレ、土地税・人頭税など、免除、ハービヤ・カーリヤの免除などが命あわせじた。だ

め、キラー・ガマによるシナモン採取の占有は総督ベーナズに、  
一七八二年には廃止された。(A.L. Mills, 'Ceylon Under British Rule', London, 1933, (New Impression, London, 1964), p. p. 203-205.)

(9) D.M. Forrest, op. cit., p. 29.

(10) 初期における軍事的な意図が強かつたが、ローレー・パントーンへの時代に入る、生産地の輸出港へいたるため、整備が急がれた。(Van Den Driesen, op. cit., p. p. 44-45.)。シナヤハの場合には、生産地が海岸低地である上に生産量も限られたため、人力輸送であったが、ローレー

ヤイロンにおけるローレー・プランテーション労働力の調達をめぐる諸問題

路網が必要となつた。一八三一年までにはキャンディー地方の主要な町のほとんどがローレーと道路で結ばれるようになつた。斯故キャンディー＝ローレー間に道路を迂回(?)〇〇四ヒコのまのまの牛車が往復していただといふ。(A.L. Mills, op. cit., p. p. 223-225. H.C. Ray ed., op. cit., pp. 303-305.)なお、鉄道は一八五〇年代のグラハム・ローレーの競合期に入りてプランターの便がいの要望が高まつたが、ローレー＝キャンディー間の鉄道の完成がよつやく一八六七年の事であり、ローレー・プランテーションの時代には総延長キロ数の不足と、各プランテーション内陸の集散地をつなぐ支線の不備のために大おおだ役割は果せなかつた。(H.C. Ray ed., op. cit., p. p. 307-316.)

(11) H.C. Ray ed., op. cit., p. 91.

(12) D.M. Forrest, op. cit., p. p. 29-31. なお、マースのグラハム・ローレーへの開設には四〇〇ヒーカーの土地が一〇年間無償貸出された上、借入金を受けてくる。ローレー輸出税・農業機器輸入税の免除、プランテーション用地の土地税の免除などは総督ベーナズによくローレー・プランテーション育成策のねらわれでもつた。(D. Snodgrass, 'Ceylon, An Export Economy in Transition', New Haven, 1966, p. 18.)

(13) プランテーション作物は多く外来種であるため、適地性が一の場合には量も多べ、またローレーの競売期間に間に合つように船積みする必要があつたため、牛車輸送の可能な道

重要な問題となつてゐる。トドシト・ローレーには、突風が妨げられるよつた起伏のある丘陵地で軟材を生む樹木に適し

トニンガラムラード。<sup>トニンガラムラード。</sup> (Bertram Bastianpillai, 'From Coffee to Tea in Ceylon..The Vicissitudes of a Colony's Plantation Economy', Ceylon Journal of Historical and Social Studies, vol VII part 1, 1964,

p. 43.)<sup>63</sup> 周囲は (63°F ~ 77°F)<sup>64</sup>、年降水量 (1,000mm ~ 3,000mm)<sup>65</sup>、無霜、湿潤・乾燥の更なる様々な条件が存在す

る。(V. D. Wickizer, 'Coffee, Tea and Cocoa, an Economic and Political Analysis', Stanford, 1951, p. 38,

p. p. 42-44. 稲田俊一「ヒロマントの農業トーハトーマ」の解説<sup>66</sup>、『滋賀県叢書』97巻、1972.)<sup>67</sup>

(∞) Van Den Driesen, op. cit., p. 41.

(∞) A.L. Mills, op. cit., p. 227.

(∞) B. Bastianpillai, op. cit., p. 46.

(11) 稲田俊一「前掲論文」P. 168.

なお、具体的な数字について稲田は、「100ha-ka-riの平均所要労働力は、印度國とカナダ農場の1/11ほんと安」、

「ラジルのヒューネ農園では110人、ヤーロウの茶のトーハトーマハドダ100人」とある。<sup>68</sup> (正解文、P. 173.)

(12) ものの戦後のアフリカ新興諸国では小規模家族経営の商品作物として発展しつゝある事は、栽培の比較的容易なロブスター・ヒューネ (Coffea Robusta) が主流であるといふ事が述べられており、畠田は極めて。<sup>69</sup> (深沢八郎「半島のヒューネ」経済<sup>70</sup>『トニア経済』第8巻第一号、1967, p. 5-6.)

(13) 労働者階級の立場<sup>71</sup>を参考。

J. L. Shand, 'The Tea, Coffee and Cocoa Industries of Ceylon', Journal of Society of Arts, 1890, p. 180.  
M. L. C. Ilangakoon, op. cit., p. p. 103-113. V. D. Wickizer, op. cit., p. p. 44-52.

稲田俊一「前掲論文」p. 172.  
の解説<sup>72</sup>を参照。

H.C. Ray ed, op. cit., p. 100.

(14) ヒューネの改革の中の重要な項目として、ハーベイ・カーリヤを廃止して人々を土地から解放し職業選択の自由を与えた事があげられる。ハーベイ・カーリヤは元来は王に対する賦役労働であつて、土地を保有している者が各自のカーストに応じ種々の賦役労働を行なつた。(中村龍司「ヤイロハートにおけるハーベイ・カーリヤの農業の成立」『トニア経済』第15巻第1号、1964, p. 6, p. 10.)<sup>73</sup> 一方、ラバーブの植民地主義の趣旨これより解説<sup>74</sup>。

(15) Van Den Driesen, op. cit., p. 35.

(16) D. Snodgrass, op. cit., p. 29.

(17) 岩村道臣「前掲論文」p. 13.

(18) Michael Roberts, 'Indian Estate Labour in Ceylon during the Coffee Period (1830-1880)', The Indian Economic and Social History Review, vol III part 1, 1966, p. 2.

(19) 岩村道臣「植民地の村落社会と海外移住」(半嶋味編『マニア史とその村落共同体の研究』東大出版、1974年版)

p. 278.

(22) M. Roberts, op. cit., p. 3.

(23) R. Jayaraman, 'Indian Emigration to Ceylon: Some Aspects of the Historical and Social Background of the Emigrants', The Indian Economic and Social History Review, vol IV, part 4, 1967.

(24) H.C. Ray ed, op. cit., p. 102.

(25) R. Jayaraman, op. cit., p. 321, p. 326.

(26) Ibid., p. 321.

(27) D.M. Forrest, op. cit., p. 41.

(28) M. Roberts, op. cit., p. 3.

(29) Sinnappah Arasaratnam, 'Indians in Malaysia and Singapore', London, 1970, (Rev. ed., Oxford, 1979) p. p.

(30) 1880年以後の植民地、ヤーロハの一部に種族混居地帯が形成された。 (Van Den Driesen, op. cit., p. p. 162-172.)<sup>9</sup>

(31) M. Roberts, op. cit., p. 3.

(32) D.M. Forrest, op. cit., p. 42.

(33) M. Roberts, op. cit., p. p. 3-4.

(34) Kernal S. Sandhu, 'Indians in Malaya...Some Aspects of their Immigration and Settlement 1786-1957', London, 1909, p. p. 89-90. Ravindra K. Jain, 'South Indians on the Plantation Frontier in Malaya', New Heaven, 1970, p. 194, pp. 198-200.<sup>10</sup> 同書の第1章の「インド人労働者とその労働力の調達」を述べる。

(35) Van Den Driesen, op. cit., p. 53.

(36) William Sabonadière, 'The Coffee-Planter of Ceylon', London, 1866 (2nd ed., 1970), p. p. 102-110.

(38) G. E. Turner, op. cit., p. p. 21-22.

(39) D. Snodgrass, op. cit., p. 26.

(40) 代理商社は、一八二〇年以後出現した植民地的企业といわれる。販売や経営の熟練者が稀な國への外資投入のリスクを少しあるためには考慮された。(G. C. Allen and A. G. Don-

nithorne, 'Western Enterprise in Indonesia and Malaya...A Study in Economic Development', London, 1957, p. 52.)

ヤイロン銀行は一八四一年の開行。恐慌時にオリエンタル・バンクに吸収されたが、コーヒー産業の崩壊と歩調をあわせぬかのように、一八八四年オリエンタル・バンクは倒産した。

(41) 深沢八郎、前掲論文、p. 5.

留和五十四年度修士論文叢書（追加）  
「古代中国における非神話化の諸相」

清水 文子

ヤスペースの「枢軸時代」の構想が、同時に「非神話化」の時代をあらわしていたことは間違ひでない。前歴一紀元前五〇〇年前後一が、中国、ギリシア、インドの三地域において、経済的基礎の上に知識人という特殊な階層を生み出しつゝ社会的背景を準備していたのであった。中国においてもギリシア、インダと同様に、合理的思考の萌芽以

前には神話的な方法ですべてを説明しようとした時代が横たわっていた。しかし、中国の哲学・宗教の特筆すべき傾向であるが、孔子の「怪力乱神を語らず」という現実的合理主義精神が前時代の荒唐無稽な神話群からの決別に尽力するとともに、一つの「非神話化」の方向として「歴史化」という過程を促進させていった。すなわち秩序世界、文明社会の創設者として堯・舜・禹などを歴史上の古聖王として描写し、現存するコスマスの肯定のもとに政治的な「神話」を儒教的倫理によって再編成したのであった。一方、孔子学派とは発生的に起源を異にすると思われる道家の知識人たちは、民俗社会に培われた神話的思考を基盤として儒家とは対照的な思想、すなわち秩序世界確立以前の混沌一彼らの究極的実在「道」一にノスタルジーを抱き続ける哲学であった。混沌から世界が生成する一という普遍的に見出される宇宙生成神話が古代中国にも伝承されていたのであらう。それをモチーフに『老子』や『莊子』を形成していく思想家たちは存在論的な哲学を編み出した。この意味で彼らの思想は、J・ニーダム等も認めるように、前ソクラテス期の自然哲学との類似が指摘されるよう。ギリシアにおいても中国においても哲学は神話から胚胎し、合理化が助長される一方でつねにその母胎からの断絶を拒んできたのである。『莊子』内篇の最後を飾る有名な混沌の寓話は、一人の偉大な哲学者によって新たに創作された「神話」であり、彼の哲学の結晶であった。